

をとりまとめた。

具体的に有効な界面活性剤は次のとおり。

- *直鎖アルキルベンゼンスルホン酸ナトリウム (0.1%以上)
- *アルキルグリコシド (0.1%以上)
- *アルキルアミンオキシド(0.05%以上)
- *塩化ベンザルコニウム(0.05%以上)
- *塩化ベンゼトニウム(0.05%以上)
- *塩化ジアキルジメチルアンモニウム (0.01%以上)
- *ポリオキシエチレンアルキルエーテル (0.2%以上)
- *純石けん分 (脂肪酸カリウム) (0.24%以上)
- *純石けん分 (脂肪酸ナトリウム) (0.22%以上)



次亜塩素酸水については、有効塩素濃度35ppm以上の次亜塩素酸水(電解型/非電解型)を有効と判断。ジクロイソシアヌル酸ナトリウムを水に溶かしたものは、有効塩素濃度1

00ppm以上について有効とした。流水でかけ流すときは「有効塩素濃度35ppm以上」拭き掃除に使うときは「有効塩素濃度80ppm以上」のものを使うよう呼びかけている。(空間噴霧は非推奨)

なお、従来から新型コロナウイルス対策として物品の消毒に使用することが推奨されている「次亜塩素酸ナトリウム」(ハイター、ブリーチなどの塩素系漂白剤の主成分)とは別のもの。混同しないように。

コロナと体温計

新型コロナウイルスの流行前、熱を測る機会といえれば体調を崩した時ぐらい、今では日常的に体温計を使っている方も多いことだろう。

そもそも体温計は何故脇の下に挿すのか？平熱はどうやって出すのか？猛暑の夏場でも正確に測ることは可能なのか？そんな疑問を医療機器メーカー(テルモ)の担当者(松田さん)に聞いてみた。

松田さんによると、季節の要因が、体温計の機能に影響する可能性は低いという。

体温計は一般的に(1)気温10~40℃(2)湿度30~80%の環境で使うように推奨されている。

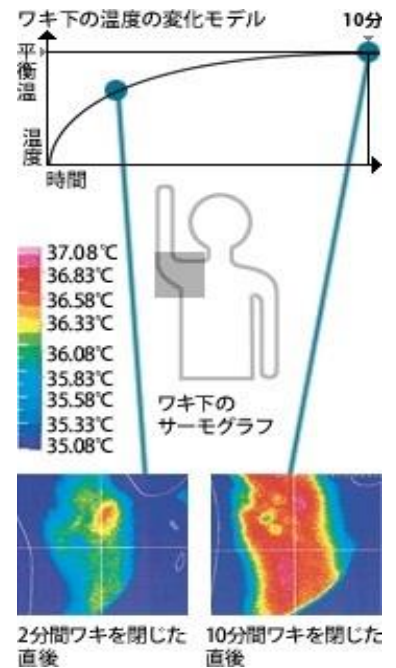


日常的な場面でのこの範囲を逸脱するのは考えづらいかもしれない。また、人間が恒温動物である点も根拠のひとつ。

正しい検温をするためには、「体温計を体のどの部分に当てるとよいかご存じですか？」と訪ねられ、「脇ですかね」と伝えると「その通りです」。

「では、その理由は何でしょうか？」
「……」

正解を次のように説明してくれました。



人間の体は、中心に近づくほど体温が高く、安定しています。しかし、胸やお腹に体温計を差し込む訳にはいきません。そこで平衡温(検温時の体温の上限)を求める上では、外気温の影響を受けづらい部位である耳、口、わき、直腸のいずれかを選ぶことになります。私たちにとって一般的なものは、脇に体温計を挿す方法です。上半身に対して30度くらいになるように、斜め下から、くぼみの真ん中へと押し上げると、よりよいでしょう。挟む際に手のひらを天井に向けると、脇が締まって密閉され、より正確に測れます。

なお、夏は脇汗をかきやすくなります。体温計の先端についてしまうとセンサーの働きに影響が出てしまいます。汗は予め拭き取り、脇を乾いた状態にしておきましょう。